

禁門の変から江戸城無血開城へと

1864年に起きた池田屋事件とは？

不平等条約¹を結んで10年。こんな馬鹿なことがあるか。幕府は腰抜けだ、朝廷の権威を復活させ外国を追っ払う尊皇攘夷だ、と機運が高まり。外国なんか追っ払え！と長州、肥後、土佐らの志士が集まり、京都の旅籠、長州藩の定宿である池田屋で尊王攘夷をどうして実現するかと会議をしていた。そこに新選組がいきなり踏み込んで9人殺されるのです。

この新選組のスポンサーが会津藩。ところがこの殺された志士の中に神戸操練所のメンバーがいた。つまり、幕府が金を出して運営していた神戸操練所、その中に幕府を倒そうとする志士がいた。

「何やってるんだ！」ということで、つまり1年で閉鎖となります。この池田屋の事件がきっかけで禁門の変になるのですが、それまでの経緯は重要なので

禁門の変が起こる以前、長州藩は急進的な尊皇攘夷主義を掲げ、公家の三条実美らと手を結び、京都政界で大きな影響力を持つ藩となっており、文久3年(1863)、長州藩は孝明天皇の大和行幸を提案します。これは神武天皇陵や春日大社を参詣して攘夷を祈願するという趣旨のものでしたが、真の目的はそれに乗じて倒幕の兵を挙げることでした。

この企てを知った会津藩の京都守護職・松平容保^{かたもり}と薩摩藩の島津久光はすぐさま同盟を結び、公武合体派の^{なかがわみやあさひこしんのう}中川宮朝彦親王に真相を伝えます。中川宮に説得された孝明天皇は、薩摩藩と会津藩に御所を守らせ、長州藩とそれに同調する公家たちを追放しました。これが「八月十八日の政変」と呼ばれる事件で、尊攘派は京都から一掃され、長州藩は会津藩と薩摩藩に対して激しい恨みを抱くようになるのです。



禁門(蛤御門):この門は常に閉ざされており、江戸時代の大火で開門されたことから「焼けて口開く蛤」から蛤御門と称される

元治元年(1864)6月5日、前年の政変によって京都から追放された尊攘派は、ひそかに京都に潜伏し、挙兵を企てていました。彼らが立てた計画は、京都に火を

¹ 不平等条約とは教科書には、外国人の犯罪を日本側で裁くことが出来ない。関税の自主権が無いなど不平等であった。これは1858に結んだ日米修好通商条約のことなのですが、一番の問題は、金と銀との交換レートが、世界標準とかけ離れ日本に不利であったことです。このことで国内の金が底をつくことになります。

放ち、その混乱に乗じて公武合体派の中川宮を幽閉、松平容保を殺害後、天皇を長州に連れ帰るといった恐ろしいものでした。この動きを察知したのが、会津藩お預かりの新選組です。志士たちの動きを知った新選組は、長州藩の定宿の旅籠・池田屋を突き止め、これを襲撃しました。これが「池田屋事件」です。長州藩の急進派はこの事件に激怒。ついに直接御所へと京都における復権を目指すべく京都出兵を決断したのです。

簡単に言えば、この京都における復権を目指しその名誉挽回に一か八かの大博打にでる。これが禁門の変(蛤御門の変 元治元年7月19日 1864)であります。

さてさて、京都山崎の天王山を本陣として久坂玄瑞、益田親施率いる先遣隊が、一方嵯峨天龍寺には国司信濃親相若干 23 歳、木島又兵衛らが控え、伏見の長州屋敷には福原越後ら総勢 2000 が挙兵、対する幕府方は主に会津藩、総勢 2 万。

ところが長州強い、「すすめー！」ものすごく勇敢。このままでは勝ち戦、しかし会津藩の援軍として、桑名藩、薩摩藩が合流してきた。この薩摩藩は西郷隆盛が率い援軍合わせると6~8万、これにはいかんともしがたく、長州藩惨敗となって逃げ帰るのである。

ところが、泣き面に蜂なんと下関に外国艦隊がやって来てた、

「なんで外国艦隊が来てるのや」それは 1 年前、下関の馬関海峡で外国船に長州から大砲打った馬関戦争(1864 元治元年 8 月)この報復にやってきていたのです。すなわち一年後の仕返しだ。イギリス、アメリカ、オランダ、フランスの四カ国。京都では惨敗その上外国迄。

しかも禁門の変で長州藩が打った大砲の弾が、御所の屋根に落ちて、長州は朝廷に向かって弓を引いたと、朝敵のレッテルが貼られ、その上下関には外国艦隊、長州藩絶体絶命の窮地、禁門の変から 2 日後、孔明天皇の命で第一次長州征伐が出されます。もう長州藩は降伏せざるを得なく断腸の思いで幕府に従順の意思を示し、その責を負い三家老切腹と相成るのです。結果国司信濃親相、増田親延、福原越後はその責任をとって従容として死についたのである。

もう長州はボロボロの状態、さて禁門の変の戦の知らせを聞いて、勝海舟、坂本龍馬は、京都に向かう。その途中戦に負けた長州の志士が刺し違えて自決する場面を目撃。二人は深刻な内乱の危機が迫っていると直感するのです。このままでは日本は大混乱に陥る。

三家老切腹で、幕府に従順の意思を示し、外国艦隊からも攻められ、長州はもうへトへト状態。しめた、チャンスだ！ ここで一気に呵成に長州潰せ！ この長州討伐の最高責任者として任命されていたのが西郷隆盛。

「西郷イケー！」となるのですが。その時西郷の頭の中には、こういう計画があっ

た。長州を倒し、半分にし、半分は天皇の領地にそして残りの半分は、この討伐に参加した藩で山分け。いい案だろう、シメシメと。

ところがこの時、チョット待て と会いに来たのが勝海舟、勝が言う。

「今の幕府って政権担当能力ないぞ(勝海舟って幕府の要人ですよ)、みんな私利私欲に絡み取られて、ふんぞり返っている連中ばかりで、今禁門の変で負けて、足腰立たなくなっているから今攻めれば、長州藩は簡単に倒せるだろうと思っているがそれは甘い、そんな藩ではない、長州藩の力を見くびるな、もし、ここで攻め込んで行くと、ゲリラ戦になり、泥沼だ、そして結果は日本国内で消耗戦となる。その時一番喜ぶのは誰か、よく考えてみろ。外国やろ。同じ民族を国の中で争わせて、弱っていくのを傍で、じーっと待っている奴らがいるぞ。イギリス、フランス、アメリカなどは舌なめずりしているぞ。

長州を潰すのはやめておいたほうがいい。これからの日本は主だった藩が、一つに纏まるべきだ、纏まったら外国に恥ずかしくない外交とか戦略とか、練ることができる。いま潰そうとしている長州はその主だった藩の一つと考えて良い。今長州を潰すというのは、自分の体の一つの手とか足とかをもぎ取るのと同じだ」

勝海舟は幕府側に立つ人間ですよ。勝海舟は、幕府の存続を考えねばならない人ですが、西郷はこの話を聞いた時、

「これひどく惚れ申候」って大久保に手紙を書いている。即ち西郷は勝海舟との会談で、長州温存を考えるようになるのです。

裏を返せば、長州と薩摩が手を結べば、幕府を倒せるぞというアイデアを注入したのは勝海舟。しかし長州と薩摩は犬猿の仲。

実際のところ薩摩は長州大嫌い、長州は薩摩大嫌い。2つの藩が、手を結んだら倒幕ができ、新しい日本新生が可能であると、わかるのですが頭ではわかっていても出来ませんか？

ところがこの出来ないことをできるように画策したのが坂本龍馬です。

じゃどうしたか、長州のトップに木戸孝允(桂小五郎)がいた。この木戸は、さて困った、すぐ幕府軍合同36藩が束になって長州に攻めくる、しかし今戦ったら長州は負ける、だってへトへト、しかもいい武器ないもん。外国は武器売ってくれないし、と思案していたところに坂本龍馬が出てくる。

「木戸さん、ええ方法があるで！あんたも頭の中にある通り、あの幕府連合軍に勝とうと思ったらいい武器、それはイギリス式の新兵器を購入してそれを使うことや。いくら多くの旧式の武器で固めても、新兵器を使えば勝てる。これ以外に長州が勝てる道はない。いい武器使いな！」と

ところが、幕府に対抗し、また禁門の変以降、朝廷に弓を引いたということで、幕府は目を光らせており外国はどこも武器を売ってくれない。このままだったら、長州お手上げ。

「でも木戸さん、手に入れる方法がありませ！ 俺、実は会社持ってんね。私が売りましょう」

これが亀山社中、日本最初のカンパニー、株式会社。実は亀山社中が、薩摩の名義でイギリスから最新兵器を買い、それを長州に売るよ、金は亀山社中に振り込んで！

即ち薩摩が買った武器を長州に横流し、それなら長州は見たくもない薩摩の顔見なくてすむよ。金だけとって武器渡さないってこともないよ。幕府も気が付かないよ！

一方薩摩には芋はあっても米は不足している。ところが長州は、毛利の殿様の三白農業改革で米は沢山ある。その米を売ってくれんか、それを薩摩に流す。両者ほくほく。めでたし、めでたしではないか、しかもお互い嫌な顔をみなくてすむ。

長州には当時米があった。例えば小野田の高須からの沖、すなわち高泊、今商業地になって、GSスタンド、スーパーなど、出来ているが、昔は全て田んぼ、いつ出来たのか、これは関ヶ原の戦いで豊臣側についたため、中国五県から山口県に閉じ込められ、財政逼迫、そこで殖産興業三白²政策を推し進める。その一環が、高泊開作。したがって米はありました。又資金的にも豊かになっていました。

即ち、現代でいう。共存共栄だ！ 右のものを左に、左のものを右に、お互いにホクホク。

ここに薩長同盟が成立ですが、一回で同盟成立したわけではなく、最初の会合は長州の木戸孝允、すなわち桂小五郎、対する薩摩は西郷隆盛、場所は山口市に今も残る枕流亭(現在、瑠璃光寺の入り口の近くに移築してあります、もとは道場門前の一の坂川の近くにあったのです)で会合を行いますが、西郷隆盛と桂小五郎の意見が合わず、その



木戸孝允、坂本龍馬、小松帯刀、西郷隆盛

まま散会します。しかしその2週間後、京都にある小松帯刀邸にて、再び会合し、ようやく薩長同盟成立(1866)となりました。

² 長州藩が推し進めた殖産興業で、コメ、塩、紙のこと。いずれも白いからこう呼ばれた。このおかげで長州は関ヶ原の戦いで禄高が120万石から37万石に減封されたのですが、幕末には100万石の大藩になっていた。この財政があったからこそ、明治維新につき進めたのです。

結果西郷隆盛、木戸孝允らはこの会合で両者ともに協力し合い、一緒に幕府を討つことに合意し、連合討幕軍を結成します。

薩長同盟の成立は、薩摩藩が第二次長州征討へ参加しないことを決定づけ、倒幕へ向かって薩摩藩、長州藩が足並みをそろえたことを証明するための会合であったと言っても過言ではなく、日本の将来を見据えた西郷隆盛だからこそ実現できた同盟ともいえるでしょう、とはいえ、その西郷にその判断をさせたのは、勝海舟との交友があったからです。

とはいえ、長州藩の中にも幕府への降伏論を唱える「俗論派」もあり、このままではまじかに迫った第二次長州征伐でまたしても幕府に降伏か、その状況に激怒した高杉晋作らは藩内の「俗論派」の正規軍に反旗を掲げ勝利(功山寺挙兵³)し、藩内も一枚岩となります。加えて薩長同盟が成立。第二次長州征伐(1865~1867)が始まります。幕府は 15 万もの大軍で長州に襲いかかりますが、幕府軍は、石州(石見)・芸州(安芸)・大島(周防大島)・小倉から攻め込む作戦を取りますが、芸州石州口に待ち構えたのは戦術の天才・大村益次郎。

射程距離の長いミニエー銃を使いこなす大村益次郎はこの戦いで圧勝し、浜田城、石見銀山の要所を抑え、小倉城を陥落させます。

このミニエー銃は、命中率が素晴らしく、100M 離れて約 95%、すなわちライフル銃です。殺傷力が強い、一方幕府側が使っていたのがケベール銃。これは敵の集団に打ち込んで敵を攪乱するのが目的で、命中率は低い。ライフルは刻まれておりません。



ミニエー銃

長州は英米との馬関戦争で、兵器による差を痛いほど知っており、薩長同盟により坂本龍馬の協力で最新兵器を選択購入したことが、この長州勝利の要因です。この第二次長州征伐に敗北し、これにより幕府の威信はガタ落ち。加えて徳川家茂^{いえもち}が病死したこともあり、勝海舟に長州との講和を結ぶよう命じます。時は 1866 年、慶応 2 年であります。ここに西郷隆盛、勝海舟による江戸無血開城(1868 年)と続くわけですが、とはいえ、旧徳川の幕臣、徳川派は尊王攘夷に「あ！そうですか」とは言えない。そこで始まったのが戊辰戦争です。その皮切りは「鳥羽伏見の戦い」から始まりました。これは 1869 年 6 月に終結する「戊辰戦争」の初戦となるのです。

新政府軍は、「鳥羽伏見の戦い」に勝ち江戸に迫ります。さあ、江戸で幕府軍と激

³ 下関長府の功山寺で、藩内旧来の派閥が返り咲き、尊王攘夷派の急進派が力を失いかけた中、高杉晋作が長州男児の肝っ玉を見せつけ、「一里行けば一里の忠、二里行けば二里の義」と決起し伊藤俊介(博文)らと挙兵、奇跡的に勝利した事件、時に晋作 26 歳。

しい戦闘が予想される。江戸は炎上するか、江戸市民は？ しかも、勝海舟が仕えた徳川幕府が消滅するのではないか、勝海舟は手を打ちます。鳥羽伏見の戦いに勝ち、錦の御旗を掲げ東進する、駿府まできていた新政府軍の西郷隆盛に江戸城を官軍に無抵抗で明け渡す代わりに、徳川家に寛大な処置をしてくれる様たのみますが、旧幕府の老中らは、頭の片隅に、新政府の重要役職に就けるとする節があったが、ところが、

「なにそんなことはさせないぞ」といのが新政府軍の考え、そりゃそうでしょう。長州にあっては関ヶ原の戦いで豊臣についたばかりに 260 年間、外様としてしいたげられ、恨みつらみをこの際果たさねば！！これは薩摩藩も同じ。

さて勝と西郷との一対一の交渉、勝が「黙って兵隊引いてくれ」と交渉をするときに、勝がとった戦術。黙って帰るならそれでよし、それでも江戸を攻めるなら、来いや！ その代わりに幕府軍は手を打ってある。

さそれは何でしょう、実は江戸には火消しがいる、例の「め組」とか言うじゃないですか。この火消しは江戸の隅々まで、くまなく知っている。そこで、この火消しに大量の爆薬を委ね、江戸のポイントに爆薬が、仕掛けてある。来るなら来い、その爆薬に火を点けるからな、攻め込んでくる新政府軍みんな火あぶりだ！

この戦術、どこから出たか、それは彼の語学力の為せる技です。彼は、来たるべき、新政府軍との戦いにいかに、戦うべきか、しかし、実際に戦っては両者へトヘトになる、そこでイギリス、フランスにパッキリでは、意味もない、しかし、新政府軍は勢いついているので江戸に攻め入るであろう、そこに脅しはいる。

これはナポレオンがモスクワ攻略できなかった方法です。これで戦争の天才と言われたナポレオンが退却した、それを彼の語学力で、戦争に明け暮れていたヨーロッパの歴史を調べに調べ知っていたということです。

まさにこの江戸無血開城は、勝海舟の語学力のなせる業とも言えます。

「来るなら来いや！」この気迫に西郷、「わかった」これが世界歴史上まれとっていい無事無血開城です。

これで明治維新は 9 割がた完了とっていいと思います。このように当時の志士はギリギリのところ知恵を出しアジアで唯一とっていい、植民地にならずにその後の日本が築かれていきます。そこには多くの志士の血が流れ、各地に慰霊(供養)碑が建っていることから頷けると思います。

この亀山社中が後、有名な海援隊になります。昭和の良き時代坂本龍馬に心酔していた武田鉄矢さんが自分のグループに海援隊と名前を付けたのは皆さんよくご存じ。



二叟の旗

その海援隊の会計係が岩崎弥太郎ですね。海援隊は貿易会社、その流れから海運業を起こし今の日本郵船につながり、その社旗は海援隊の二^に曳の旗をベースにしています。また SoftBank のグレーの二本のロゴマーク、これは孫さんが坂本龍馬を尊敬され、海援隊に因んで二曳の旗を使われています。

さて、幕府に仕え、廃藩置県で禄を失った武士が、刀を鍬に持ち替えて、開いたのが静岡の茶園ですね。新幹線での車窓に茶園が旅情を添えますが、そのような歴史があったのです。そして昔見た清水の次郎長映画、その場面には三度笠の清水次郎長一家が茶畑を歩く姿が登場しますが、清水次郎長と茶畑は切っても切れない歴史があるのです。当時東海道筋治安を一手に引き受けていたのが、山本長五郎すなわち清水の次郎長で、清水港で新政府と幕府の仲介役を果たしたのも清水次郎長です。明治になってからはその武士が栽培したお茶を売りさばいたり、自ら地元の開墾や英語の私塾を作るなど、実業家でもあった人物でもあります。

勝海舟は明治の新政府の歴史にはあまり登場しませんが、新政府の役人として茶園開墾を支援し、のちの生涯は、幕府に仕えていた武士たちの世話をし、晩年は赤坂氷川の地で「氷川清話」等を執筆し 77 才で亡くなっています。

勝海舟がこの清水の次郎長に会ったとき、「次郎長親分、あんたの子分の中でねあんたのために命を捨てるという子分何人いてる？」ちょっと挑戦的なこと聞くのです。そしたら次郎長が「あっしのために命を投げ打ってくれる子分なんか、ひとりもいません」えっと勝海舟が驚いてる時に、「でもねえ私は子分のために死ぬ覚悟はいつでもできています」というのを聞いてこれかーッと

この次郎長一家の結束の固さっていうのは、この次郎長親分の考えかと感心したという話が、氷川清話に出てきます。

まさに幕末の動乱期、二百数十年の万石を誇った徳川幕府も幕を下ろすのですが、徳川に忠誠を誓う会津藩、この会津藩と新政府軍との戦いが、戊辰戦争の中でも有名な会津の戦い。白虎隊の悲劇となります。また松平容保の家臣の西郷頼母のその悲劇も今に伝わります。なかでも白虎隊の生き残り飯沼貞吉を長州藩士檜崎頼三が知行地の美祢市に連れ帰り、療養させ養育し、後日本の発展に尽くした逸話が語り継がれております。

西郷頼母は会津の戦いで、すべての家族を失い、養子として育てた西郷四郎が上京し講道館で小柄な体格ながら、猫のような身のこなしで柔道の四天王と称されるまでになる。言葉はお国なまりが激しく、西郷四郎の師匠の導きで、夏目漱石の家に入りし、漱石の友人の作家が、西郷四郎のそのキャラクターをベースに「姿三四郎」を書く。我々が幼いころ TV で観た姿三四郎がこんなと



西郷四郎(山嵐)

ころで戊辰戦争会津の戦いにつながっているとは感慨深いものがありますね。

この飯沼貞吉物語、西郷頼母物語はまたの機会に紹介しましょう。長文読んでいただきありがとうございました。